

2019年11月10日（日）東京家政大学において関東支部第25回秋季研究大会が行われました。170名を超える参加がありました。今回の大会テーマは「授業づくり」です。

## ■ビデオによる授業研究と協議（中学校）

「中学3年生：自分の町について考える — 現在完了（継続）の導入から表現まで」

授業者：木村 祐太（石川県・白山市立北星中学校）

分析者：谷口 友隆（神奈川県・相模原市立大野南中学校）

木村祐太先生による中学校3年生の授業のビデオを視聴し、皆で分析・研究をしました。とても丁寧な導入で生徒も真剣に先生の授業を受けている姿が印象的でした。生徒は自らの経験や思いを主に現在完了形を用いながら言葉を発していました。分析者の谷口先生の「授業を平面から立体に」というアドバイスがとても印象的でした。「ことば」として英語を生徒に意識させ、内容や意味を重視した授業を展開することが大事であるというメッセージをこの授業研究を通して学ばせていただきました。



中島 利恵子（新島学園中学校・高等学校）

## ■研究実践報告

### <第1会場>

①「人物伝のレッスンを「自分ごと」として考える授業実践 —国際バカロレアの「10の学習者像」に着目して」

発表者：安田 明弘（武蔵高等学校中学校）

この発表では、様々な教科書のトピックになっている、いわゆる人物伝をどのように扱うかを再考し、デメリットをカバーするような授業の流れが示された。そのデメリットというのは、題材によって適切なアウトプット活動をその都度考えなければならないことや、「なぜその人物を学ぶのか」という根本的な問いに答えられていないというものであった。発表者は、国際バカロレアの「10の学習者像」や、「本質的な問い」などを文献などから引用し、授業改善を行った様子が本発表で見られ、授業での「問い」の重要性を強く認識し、学びの多いご発表であった。



## ②「自己表現に向けた small talk の活用」

発表者：山城 仁（東京学芸大学附属世田谷中学校）

この発表では、small talk をいかに授業中に効果的に活用していくかが示された。また、small talk を通して、生徒の習得状況のアセスメント、そして small talk を通して生徒の英語運用力を高めていくことが重要であるということであった。発表者は、勤務校での実践を通して、生徒が思わず聞きたくなる話が展開されたり、自然なやりとり、双方向の対話が生まれることなどが small talk の活用から見られる効果であるということ述べていた。私もこの意見に強く共感し、ご発表から学んだことを次の授業へ生かしていきたいと思いました。



今田 健蔵（東京大学教育学部附属中等教育学校）

### <第2会場>

## ①「話すこと [やり取り] を成立させるための質問文の指導」

発表者：鈴木 千貴（神奈川県・横浜市立桜丘高等学校）

英語で対話を継続する力を、どう育てるのか？新しい学習指導要領実施に向けての、課題の一つです。鈴木先生は高校の教室で、相手の発話に応じて適切な質問文を即座に返す、という活動を継続して行いました。その進め方を、実際のワークシートを用いて、参加者に実際に体験していただく形で報告されました。最初の発話自体に、うまく質問を引き出せるものとそうでないものがある、といった事実は、実践してみたからこそ分かったこと、として参考になりました。



## ②「英語大好きからの一歩前進 —第6学年児童の「やり取り」の具体像」

発表者：石川 雄一郎（神奈川県・海老名市立今泉小学校・有鹿小学校）

学校全体で外国語の研究に取り組み、児童の学習意欲を向上させることができた。この成果を受けて、さらにそこから先の子どもたちの成長を目指していった実践の報告でした。目的、場面、状況、必然性などの重視、十分な練習時間の設定、発表の際の「コース選択」の導入、などの工夫を通して力をつけた子どもたちの姿を、映像で見ることができました。小学校でも高学年の授業では、笑い声や歓声ばかりを求めなくて良い、という石川先生の指摘には、実践の積み重ねを通したからこそその重みを感じました。



大鐘 雅勝（千葉市英語教育支援員）

## <第3会場>

### ① 「教科書に+αする表現活動の工夫」

発表者：菊池 智美（東京学芸大学附属世田谷中学校）

菊池先生が、日々の授業を通して、生徒に付けたい表現力として(1)日々の些細なことを楽しく英語で語りあえる。(2)見聞きしたことを自分なりの言葉で reproduce できる。(3)出来事や得た情報について、自分の気持ちや考えを言える。(4)自分の扱える英語で柔軟に表現しようとする。これら4つを示され、その力を付けるための指導例を紹介してくださいました。What's new? という活動、retelling に自分の考えを加える What do you think? という活動、英語落語を演じてみようなどです。どの活動においても、生徒の気持ちや感情を引き出し、そこから発せられる生徒の表現を大事にされていました。ビデオ視聴で、生徒が自分の感情を入れて英語落語を生き生きと演じていた姿が印象的でした。



原田 博子（東京都・文京区立第十中学校）

## ■ポスターセッション

「材料の味付けについての一試み ―資格試験の活用と他教科との連動」

発表者：三串 浩司（兵庫県立神戸高塚高等学校）

「コア・カリキュラムから考える外国語活動・外国語の校内研修」

発表者：松崎 奈穂（埼玉県・上尾市立原市南小学校）

「描く英文法 ―大学初等英語教育と TOEIC 講座におけるセンテンスダイアグラムの活用」

発表者：伊藤 雄馬（富山国際大学）

「やり取りにおける児童への働きかけの工夫」

発表者：服部 正史（埼玉県・久喜市立菖蒲小学校）

「B6 の白紙を用いた文法学習」

発表者：真島 由朱（大阪府立箕面高等学校）

ポスターセッションでは、小学校から中学校、高校、さらには大学まで多くの先生方にご発表頂いた。高校における英語文法の教え方から、小学校における英語教科化に向けての研修会の実施についての発表など、内容も多岐にわたったものとなった。小学校英語の教科化をはじめとする校種間の連携・つながりが時事的トピックであるが、そのような視点においても、発表の先生方

と参加された先生方が他校種の指導や教科としての実態を垣間見ることのできる機会となった。また、発表者の先生方とその発表に参加された先生方同士で意見や情報などを交換し合い、発表の資料や説明に対して即座にその場で質疑応答が行われた。ポスターセッションならではの、発表をする側と聞く側の距離の近さを感じられた。



樋口 智之（神奈川県立上矢部高等学校）

### ■ビデオによる授業研究と協議（高校）

「コミュニケーション英語Ⅲ：次期学習指導要領を見据えた生徒の“英語力”を高める授業」

授業者：嶋田 拓哉（千葉県立船橋啓明高等学校）

分析者：狩野 晶子（上智大学短期大学部）

船橋啓明高校の嶋田先生の授業は、採用から4年目にも関わらずとても学ぶべきことが多い授業であった。まず1つめに挙げられる点は、当たり前なことではあるが全て英語で行なっていたという点である。生徒がついてこなかったり、授業をどう展開していいかわからず、全て英語で行うことに心が折れてしまいそうになることもある。しかし、嶋田先生が1年生から継続しているだけあり、先生の流暢な英語にも生徒はしっかりと反応していた。2点目にワークシートも生徒が教科書の内容をまとめ、生徒自身で整理するために丁寧に作られていた。また生徒を授業に食いつかさせるためにICT機器をしっかりと使用していた点もとても参考になった。自分自身4年目のときに嶋田先生ほどの授業ができていたかと振り返り、比較してみると嶋田先生の授業にはとても感心させられる。嶋田先生の授業を参考にして、また明日から生徒が主体的に考え、思考し、判断できるような授業を展開していきたい。



江尻 友也（千葉県・流山市立おおたかの森中学校）

## ■講演&ワークショップ

「教師として成長するため — 授業づくりを考えましょう」

講演者：太田 洋（東京家政大学）

関東支部で太田先生のワークショップ形式の講義は久しぶりだったと思います。最初に、Kellerman の U 字型発達曲線を紹介され、「習得って何でしょうね？」という問いを投げかけました。確かに、頭の中でパターンや規則性を見いだそうとしている時期が大切です。その U 字の下がる時期が大切です。この時期を経て規則性を身につけて正しい英文を作ることができます。この自由に発話できる機会を与えることが大切だとお話しになりました。



また、内容と言語がコントロールされた活動も大切だけれども、自由な発話を促すような内容も言語もコントロールされていない活動をやってみてはどうでしょうか。

次に小学校では多く取り入れている中間振り返りを取り入れてみてはどうかと提案されました。授業中にまずやらせてみると、児童・生徒は今までに習った言葉を使って何とかしようとしません。そして中間振り返りを行い、再確認します。そして最後にできたこと、できなかったことを振り返ってみてはどうでしょうか。

PPP(Presentation-Practice-Production)と TBLT(Task-Based Language Teaching)の比較を提示されました。そして、U字型発達曲線にもあるように、生徒にやらせてみて、「どう言ったらいいのだろう」という「困った経験」をさせることが必要であると提案されました。

最後にグループで実際の英語使用場面を想定してタスクを作るワークショップを行いました。指導する文法事項を想定し、使用場面を作りました。

教師と児童・生徒とのインタラクションを通じて、英語を少しずつ習得していくのだということを再確認しました。児童・生徒が間違ったときにどうケアするのが大切だと実感しました。日々自分自身の教え方を再考することが必要だと感じました。あっという間の100分でした。

最後に小学校英語に関する阿野先生との共著も紹介されました。日々学ぶ姿勢を学びました。ありがとうございました。

武田 富仁（群馬県立板倉高等学校）